放送局部門



ＮＨＫ熊本放送局

［2026/5/30 放送］

ETV特集
「見過ごされた声
～水俣病 知られざる水銀被害～」

◎プロデューサー／前田 達也
◎ディレクター／中津海 法寛

［59分］

●制作意図

水俣病公式確認から７０年。３年にわたる調査で判明した知られざる被害を初めて伝える調査報道である。これまで「手足のしびれ」などの感覚障害に注目が集まってきた水俣病の新たな「病像」を貴重な証言で明らかにした。７０年の歳月が経っても水俣病の問題が終わっていないことを、新たな事実と共に伝えるべく努力した。

●あらすじ

水俣病公式確認から７０年。３年にわたる調査で判明した知られざる被害に迫る。水俣湾沿岸で生まれ育った高齢者を対象にした調査で、認知機能の課題を抱える人が数多くいることが明らかになった。母親の胎内で水銀によって脳に影響を受けたとみられている。生きづらさを抱えて生きてきた水俣の人たち、その事実を記録に残し、後世に伝えようとする人々。見過ごされた声を拾い上げようとする苦闘の日々を追った。

放送局部門



北陸朝日放送

［2025/12/31 放送］

震災と人間2025 「地図にない村」の未来

◎プロデューサー／黒崎 正己
◎ディレクター／黒崎 正己

［70分］

●制作意図

能登半島地震から２年。奥能登の被災地では人口流出が加速し、地域コミュニティーの再生が大きな課題となっている。特に急速な過疎化が進んでいるのが珠洲市北部の外浦地域だ。かつて「西海村」だった外浦田畑に乏しく、塩づくりと出稼ぎが生業の貧乏村だった。塩田整理、満蒙開拓、国営農場事業、そして原発計画と、この地は明治以降、国策に翻弄されてきた。地震と豪雨に見舞われながらも、外浦で暮らし続ける人々がいる。復興報道では光の当たらない辺境の地で、小さな声に耳を傾けたドキュメンタリー。

●あらすじ

番組内容▽故郷忘じ難し…長期避難地域・仁江町区長の苦悩▽珠洲市外浦…かつてそこには「西海村」があった▽伝統の塩づくりを守る…揚げ浜塩田６代目の夏▽「砂取節」哀歌…93歳の古老は故郷を離れた▽貧乏村は大陸をめざした…「満蒙開拓」父は黙して語らず▽さいはての地の個人商店…珠洲市高屋町「井上商店」の一日▽「西海」から「さいかい」へ…外浦を支える移住者の思い

放送局部門



琉球朝日放送

［2026/03/29 放送］

QAB報道特別番組 「黒潮に抱かれて ～与那国島と台湾～」

◎プロデューサー／中村 裕
◎ディレクター／塚崎 昇平

［51分］

●制作意図

日本最西端の与那国島の自衛隊増強や軍事上の位置付けを伝えるとともに、与那国が国境の先にある台湾と紡いできた「交流史」にも焦点を当てることを目指した。交流が自然発生的に生まれ今も続いていることを伝えることで、台湾との地理的な近さを強調する中で軍備強化を正当化する「地政学」の議論を相対化させる狙いもある。加えて、沖縄と台湾の連帯の可能性を探ることも狙いの一つだ。国際社会で孤立に追いやられる台湾と、「太平洋の要石」として日米の軍事拠点とされてきた沖縄は、大国の思惑や国際社会の中で重荷を背負わされてきた点は同様だ。辺境の島に生きる人々が大国の理論に翻弄される共通点を描き、連帯に向けた論点を提示した。

●あらすじ

「台湾有事」を巡る大国間の勢力争いの「前線」に置かれる与那国島と、台湾に焦点を当てたドキュメンタリー。ワシントンでは台湾有事での核兵器使用も想定される一方、与那国の町議会議員は、自衛隊配備と表裏一体に進む全島避難計画に疑問を呈する。与那国は隣り合う台湾と、独自の交流史を編んできた。取材を続ける記者は「歴史を理解し、島に視線を向けるべき」と訴える。ある沖縄の詩人は50年以上前に「大国の取決めに従属させられる少数民」と台湾を沖縄と重ね合わせた。現在の有事を巡る議論にこの視点を重ねた台湾出身の学生は「双方を結ぶヒントになるのでは」と語る。国家体制に辺境に置かれた島々からの問いに、正面から向き合った。

放送局部門



福島中央テレビ

［2025/12/29放送］

CHAOS
～無法地帯の強者と弱者～

◎プロデューサー／丸 淳也
◎ディレクター／岳野 高弘

［56分］

●制作意図

東日本大震災と福島第一原発事故の極限状況を、15年にわたる記録と証言、当時のOA映像をもとに分刻みで再構成しました。「情報と意思決定の崩壊」を描き、国家・東電・現場が分断される中で、最も弱い立場の人々にしわ寄せが集中する構造を可視化しました。地元局として誰の側に立ってこの事故を捉えるのかという意思を明確に打ち出し、混乱の中で命の危機に晒された人たち、選別された多くの命があったことを伝えます。巨大システム・巨大権力に翻弄されながらも、番組終盤では人間の「生」がたゆむことなく、命そのものへの畏敬を改めて思い出してほしいと訴えています。そして、15年が経っても未解決の問題があることを強く提示します。

●あらすじ

福島第一原発事故の真実を、未公開映像と当事者の新証言から再構成。
全電源喪失でメルトダウンが進む現場に対し、官邸や東電は情報断絶により迷走し、撤退を巡る混乱など法やシステムが機能せず個人の意志に頼る国家の限界が露呈した。
混乱のしわ寄せは情報のない弱者へ向かい、高齢者施設では過酷な移動の末に避難者の3割が命を落とす「静かな虐殺」が発生。番組は、再び原発が暴走した時に誰が命をかけて止めるのかという、現代社会への未解決の問いを突きつける。

放送局部門



ＭＢＳ

［2026/05/31放送］

映像’26
「それでも働きたい～障がい者の就労と尊厳～」

◎プロデューサー／和田 浩
◎ディレクター／樋江井 亮

［50分］

●制作意図

「ただ、普通に働きたい」。本作は、そんな当たり前の願いすら阻んでしまう理不尽な「国の制度の壁」に直面しながらも、滋賀県で自立を目指すひとりの女性の姿を通して見つめたドキュメンタリーです。

彼女個人の奮闘記だけでなく、様々な障がいのある人々に対して社会参加を阻む、日本の福祉が抱える大きな矛盾も浮き彫りにしました。

日常生活の介助は助成されるのに、職場では対象外になる現実。国連から指摘されてもルールを変えない国に対し、それでも社会と繋がり、自分の足で生きていこうとする彼女の姿から、共に生きる社会の本当の意味を問いかけます。

●あらすじ

滋賀県大津市に暮らす深田澪音さん（22）は、脳性まひによる重度障害がありながらも前向きに就職活動に挑み、40件もの不採用通知を受け取ってきた。彼女の前に立ちはだかるのは冷たい「国の制度の壁」だ。

日常生活の介助は月数万円の負担で済むが、職場でヘルパーを頼むと原則助成の対象外となり、月30万～40万円もの全額負担がのしかかる。それは国から「家の中にいなさい」と告げられるに等しい理不尽なルールだった。

国連から日本政府へ是正勧告が出される中、尊厳を持って働くという当たり前の願いを胸に、静かな挑戦を続ける澪音さんの就労への道のりを追い、この国の社会参加のあり方を問う。

放送局部門



富山テレビ放送

［2026/05/30放送］

命と避難所
～災害関連死を防げ～

◎プロデューサー／砂原 宏昭
◎ディレクター／福島 勝

［47分］

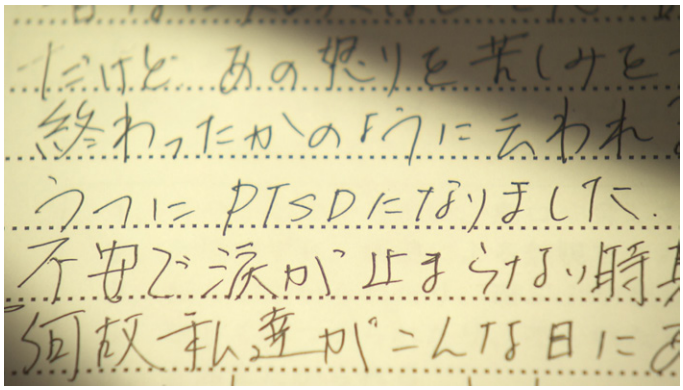
●制作意図

２０２４年元日に起きた能登半島地震では、富山県内も大きな被害を受け、以降、当社は自社制作ニュース番組で被災地の復興を伝えるとともに、次の災害に備えるキャンペーン「命と未来をまもる」を展開しております。３年目の２０２６年は避難所に起因する災害関連死をテーマに掲げ、本番組はその一環として制作したものです。
避難所を含めた災害対応が市町村の責務と定めた災害対策基本法を念頭に、
災害関連死で親族を失った避難者、避難所の運営に苦心した被災地の住民、
災害対応を指揮した被災自治体のトップ、次の時代の避難所のあり方を模索する
民間人など様々な証言をもとに番組を構成し、避難所の抜本的な見直しの必要性を訴えました。

●あらすじ

地震発生から２週間、避難所に身を寄せていた男性がその後まもなく亡くなった。
親族の話では雑魚寝の生活環境で急に体力が落ちたという。能登半島地震の
災害関連死は５００人を超え、直接死の２倍以上に達している。東日本大震災以降、
被災地の医療支援を続けてる医師は「避難所は能登で悪化した」と証言した。
今年秋に発足する防災庁の必要性を訴えてきた石破茂前首相は、災害関連死は
「人災」と指摘、今だ避難者が命を落とす日本の災害対応に懸念を示した。
災害関連死が定義された阪神・淡路大震災以降、震度７の地震は７回、劣悪な
生活環境の避難所が繰り返されている。なぜ災害で助かった命が失われるのか、
この国の避難所は安全ではない。

放送局部門



ＮＨＫ仙台放送局

［2026/03/14放送］

ETV特集
「“歳月に埋もれた声”をたずねて 福島・原発避難者の15年」

◎プロデューサー／赤上 真
◎ディレクター／池座 雅之

［59分］

●制作意図

いまだ故郷に戻れない「喪失感」だけでなく、周囲から浴びせられる「心ない声」が、原発事故の避難者たちを追い詰めていった実態を大規模なアンケートと地道な取材で明らかにした。「いつまでここにいるのか」「賠償金もらって羨ましい」…。専門家の１人は「そこには故郷や生業を失ったことに対する想像力がない」と指摘した。またＤＶや外国人差別と相通じる構造的な根深さがあるという。原発事故からの歳月は避難者の存在をより一層見えにくいものにしてきた。いまなお多くの人がつらい経験を忘れることなく暮らしていること、そして私たち社会が「被害者」であるはずの人たちを追い詰めてきたことを１５年のタイミングで浮き彫りにした。

●あらすじ

今なお２万人超が避難生活を続ける福島第一原発の事故。今回ＮＨＫは早稲田大学と共同で、避難を経験した人を対象に大規模なアンケート調査を実施、３４００人余りから回答を得た。専門家と解析した結果、いまなお３割を超える人たちが高いストレス状態にあり、そこには原発事故の影響が長く続いたからこそ現れる特徴があることが判明。さらに、生活再建を加速させようと支払われた賠償金をめぐって、避難先の住民からかけられた数々の声が避難者たちを追い詰めてきた実態が明らかになった。月日がたっても消えることのない偏見や無関心、放射能への無理解…。歳月に埋もれてきた声に耳を傾け、社会が避難者を追い詰めていった実態をあぶり出す。

放送局部門



NHK福岡放送局

［2026/06/27放送］

ETV特集
「患者さんの痛み 写真家の葛藤 ～水俣病 公式確認から ７０年～」

◎プロデューサー／植松 秀樹、梅原 勇樹、岩下 宏之

◎ディレクター／吉崎 健

［59分］

●制作意図

水俣病は今年で公式確認から70年。その歴史を振り返りながら、今なお様々な課題を抱え決して終わっていない現実を、向き合い続けてきた写真家を通して描く。発表されたよく知られた写真でも、いま改めてテレビで紹介するのは難しい時代になってきている。写された本人が亡くなり、遺族が嫌がるケースが少なくない。法的には、遺族の許可は必要ないものの、道義的な問題として、連絡が取れる人には丁寧に了承を得ながら進めた。しかし、断られて放送できない写真が何枚もあった。写真家が「封印」した写真の問題にも向き合い、聞くことが難しい遺族の思いにも迫った。写される側と写す側の葛藤を描き、メディアのあり方を問い直す機会にもしたい。

●あらすじ

患者さんの痛みを伝えようと、向き合い続けてきた写真家たちがいる。
桑原史成さん（89）は、水俣病があまり知られていない時代に最初に水俣を訪れ、初期の重症患者を撮った。被害の現実を社会に知らせた。裁判が始まると写真は、世論を動かす大きな力になった。故・塩田武史さんは、重症患者を中心に撮り、裁判で患者は勝訴したが、やがて写真を撮れなくなった。
アイリーン・美緒子・スミスさん（76）は、夫の故・ユージン・スミスさんとともに、世界に水俣を伝えたが、その後、１枚の写真を「封印」することになった。
芥川仁さん（78）のテーマは「見えない水俣病を撮る」。今も、症状が見えにくい人や患者さんの内面を撮ろうと模索している。